巻頭のご挨拶

一般社団法人　北海道林産技術普及協会
会　長　髙　橋　範　行

会員の皆様，新年明けましておめでとうございます。

平成28(2016)年の新春を会員皆様とご一緒にお慶び申し上げます。

また日頃より当協会の運営に対し，ご指導ご協力を頂き誠に有難うございます。

昨年は，一昨年4月の消費税が8％にアップされた反動が年間を通してあり，日本経済は踊り場から更に階段を上る勢いには今一つでしたが，一方で円安を背景にした外国人の来日者数が2,000万人に達する勢いで（対前年比50％アップ），日本国中，外国人が至るところで溢れかえった年でした。特に中国，東南アジアからの来日者数が顕著で，安全安心の日本製品の所謂「爆買い」により，日本景気を底支えしたことは間違いない事実でした。また大都市の不動産物件もその対象となり，新築中古物件が資材コストのアップと相まって20％程度値上がりし，ミニバブルの再来かと言われた程でした。但し，一部の地方都市を除いてはその恩恵は乏しく，都市間での格差が更に増大した年でもあったと思います。更に若年労働者が大都市部の強い雇用に引きずられて雇用の少ない地元を離れ，大都市部に集中したことにより地方都市の高齢化が進み，疲弊が進んだことは悲しいかな否めない事実と思います。

また国民に期待感を持たせた2020年の東京オリンピックによる経済効果は，エンブレム選定の問題，国立競技場建設の再検討により暫しの休止状態を経て再スタートを切ることになりましたので，残り4年で果たして万全の準備ができるのか心配になる状態で年越を迎えました。12月14日に新国立競技場の技術提案書の2案が公開され，A案のハイブリット屋根構造に対してB案は耐火集成柱でしたが，22日の閣僚会議でA案に決定されました。いずれにしても大量の木材利用の可能性があります。屋根構造材では，国産材を使用することになるはずなので（スギまたはカラマツ）会員の会社が係る建築に関わることができれば良いのですが。

木材を取り巻く環境は，円安による輸入材のコストアップにより国産材の比率が更にアップし，国産材比率50％の目標に近づいたことは事実です。

オリンピック関連施設においても国産材を使用する動きがあり，本年度も為替の影響を受けない国産材が更に脚光を浴びることは間違いない事と思います。但し国産材の使用を奨励するあまり，その調達方法を間違えば供給不安，更に価格の高騰を招く結果となりかねないという懸念材料もあります。輸入材との適材適所を考えて，棲み分け，使い分けをよく考える必要があります。限られた国民の財産である国産の木材資源を短期間の奨励ではなく，いかに長期にわたり使用できるようにし，次の世代に引き継ぐことが重要な課題と思います。

昨年の当会の活動として，4月23日の総会時に公益財団法人はまなす財団濱田康行理事長に，「アベノミクスと林業の未来」というテーマで，有益な講演をしていただきました（詳細は，ウッディエイジ2015年7月号に掲載）。

また，北海道で始めてCLTで建設された北見のセミナーハウス見学会を6月5日に開催しました。全ての部材を道内では生産できず，原料のカラマツを本州工場に持ち込んで建築したのは残念です。これ以降の同仕様の物件が道内で建設されていないのは，やはり建築承認のための強度試験を含めた建築コストの問題に起因していると思います。

更に10月4日に和寒で開催された北海道植樹祭には，道産材をPRすると共に，当会の事業の一環であるキノコ栽培管理事業の普及促進のために，林産試験場が開発したヤナギ培地を用いたシイタケの試食会を実施して，多くの入場者に提供いたし美味しいとの評価をいただきました。

今年の総会は，4月22日に開催を予定しています。恒例の記念講演としては，昨年の濱田先生の講演を踏まえて具体的に，「道産木材を北海道の住宅，公共建築物にいかに取り入れるべきか」というテーマで北海道科学大学の福島明教授に講演をお願いいたしております。沢山の会員のご参加をお待ちしております。

今年の干支は，申です。猿は，木の上を飛び回るとても活発な印象を持つ動物です。代表的な申年生まれは，戦国時代の「豊臣秀吉」です。サルといわれた知恵者でもあった秀吉のように，世の流れを敏感にとらえて，即断即決で動けば来年4月からの消費税10％アップ前の需要増に対応でき，ひと働きでき，良い年になると思っております。

最後になりますが，当会は，今年も『北海道立総合研究機構森林研究本部林産試験場』と民間企業の架け橋として，木材普及活動をさらに活発化させる所存でございます。

本年も皆様のご支援を宜しくお願い申し上げます。